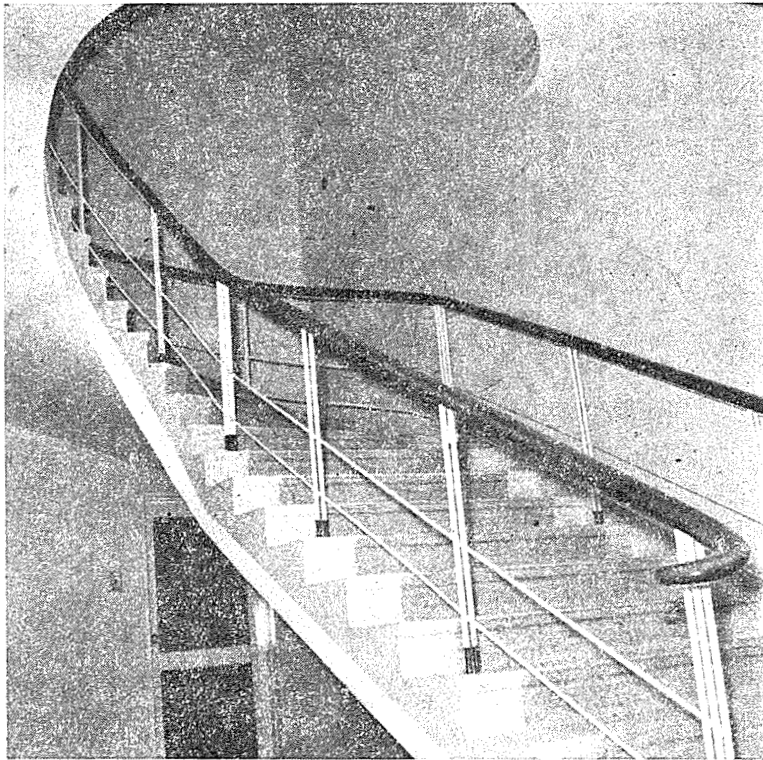


THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, July 15th, 1952. —No. 250

關西大學學報

昭和27年 第250號 7月15日



新築大学ホール入口

關西大學學報局

學報第二五〇號に寄せる

矢口孝次郎

見らるる如く學報は本号を以て第二五〇号に達した。また同時に、その創刊の日大正十一年六月十五日から算えて滿三十年を迎えたわけである。世に繼續刊行物の数は多いが三十年・二五〇号の歴史をもつに至ることは仲々容易なる業ではない。讃うに値するといわざるを得ない。

さて第二五〇号に達した學報は、何よりも、その間三〇年の関西大学の文字通りの recorded history であり、また本学の大学としての歴史はそこに始まつたといえよう。即ち學報の創刊がたまたま本学の大学への昇格とはほぼ時を同じくしていたことから考えて、それ以前の歴史はいわば前史であり、大学としての成長からいえば胎生期にあたるものである。かくて本学六五年の歴史において、大学としての出発はほぼ學報創刊の頃であつたといえる。その頃の記録にはその有様が如実に示されている。例えば、発刊の辭の中には「外には数千の校友がそれぞれ社会に重きをなし、内には三千の學生が……切磋琢磨に余念なく、百余の教授講師亦之が指導誘掖に献身的努力を拂はる」當時の状況を傳えているが、一方、第三号には次の如き記事も認められる。即ち「凡そ何れの大学に於ても教授会その他の名称の下に各教授が相寄つて授業並に訓育に關しそれぞれ腹藏なき意見を開陳し以て大学の使命を完するの便宜を増すべき機会を有するものであるが本学に於ては未だかくの如き会合のあつたことを聞かず」とされ、これを遺憾として、一日、「今橋本テルに各専任教授を招きて懇談会を催し互に意見の交換をなした」という。以て大学生協當時の状況の一端を知り得るが、これを現在と比べる時、何人も感慨なきを得ないであらう。その後三〇年の大学体制建設の歴史を記録として物語るものこそ二五〇冊のこの學報である。このように、學報は何よりも本学成長の記録であるが、その間種々の他の使命をも果たしてきた。学校と校友との連絡機関となつたこともその一つであるが、更に忘れてはならないことは、本学に未だ學術雜

誌の存在しなかつた時代において、また後にはそれを補うものとして、本学の教授たちのためにその研究を発表する機会を與えてくれたことである。そこに發表された論説は、凡てが必らずしも學術論文というほどのものではなかつたが、それが執筆者、特に當時の若い人々にとつて研究推進の忘れ難い契機を與えてくれたことを認めねばならない。これも學報の遺した功績の一つであらう。そのほか、三〇年亘る刊行の跡をたどると興味ある種々の推移を見出すことができる。その一つとして、われわれは學報の歩みの中に、日本の歴史の影さえも窺うことができる。例えば大正から昭和初頭へかけての順調なる發展は「創立五十週年記念号」(一三九号)の一冊に反映している。然るにそれから移つて、頁数も減り紙質も貶ちた昭和一五年頃の各号に至ると、掲載される論説の中にも、戦争前後の抑えられた空氣を明らかに読みとることが出来る。更に一八二号以後に至ると學報は八頁ほどの小冊子と變り、次いで戦争への突入・敗戦の連續に伴う刊行上の惡條件の裡に辛じて維持されていたが、遂に二二七号に至つて僅か四頁の紙片となり、一応の「終刊」を告げざるを得なくなつた。尤もその直後、好運にも再刊の機を恵まれたが、それも永續することはできず、昭和二〇年二月の二三三号の刊行を期として事実上終刊となつた。そしてまた、わが国の歴史も破局に向つたのである。さて終戦以後のことは詳しく述べるに及ぶまい。即ち、二年一月、二二四号として再刊された學報は、その後「関大ルネッサンス特輯号」などのエピソードを生みながら順調に復興し、二三一号以後、体裁においても刊行期日においても現在見らるる如きコンスタントな状態に立ち歸つて、ここに第二五〇号を迎えるに至つたのである。まことに慶祝に耐えない。

さてこの小文では、大部に亘る學報を閲読して得た感想の一端すら十分には傳え得ない。ただ一言。前にも述べた如くわれわれはそこに本学の歴史を読みとり得るのであるが、それと現在とを想い合せて、單に發展を謳歌し進歩のみ論結することを警戒しなくてはならない。歴史の歩みには停頓もあり、時には逆行すらあり得ることを忘れてはならない。この意味において、學報三〇年の記録は、單なる本学の生長の物語としてではなく、われわれが本学の現状を反省し今後進むべき途を研討するための資料として読まれなくてはならない。このことを一言して、ここに第二五〇号の刊行を學報のために讃えたいと思う。

(經濟學部教授)

Erwin von Zach (1872-1942)

石 濱 純 太 郎

ツァハ博士訳の韓愈詩集(Han Yu's Poetische Werke, übersetzt von Erwin von Zach 1872-1942, edited with an introduction by James Robert Hightwer, Harvard-Yenching Institute Studies VII, Cambridge, Mass. 1952.)が本学に寄贈された。余はツァハ先生には面識はないが、論著の寄贈を辱けたり又通信を交換したこともあるので、戦争ごろから先生はどうしているだろうかと兼々気になっていたから、何かの手掛りもあるかも知れないと早速一閱した。開巻早々訳者名に生歿の年次が録してあるを見てその既に故なるを知つて悵然とした。

余は終戦の翌年に訃られるまゝに貴司山治君編輯の文学雑誌「東西」の九月号に「遠方の友」と題する一篇を投じて氣掛りになっていた諸同学先生達を偲んだのであつた。その中にツァハ先生もはいつていた。思出草としてこゝに録出してみよう。

バタビヤのウエルテフレエデン (Weleveden, Batavia) に居たツァハ老博士もどうなつたらうか。彼は手紙の封筒に漢字で宛名を書いてよこしたりするほどの中国学者なんだが、西夏文字に興味を持つたかして、ロシアから西夏文のロオトグラフを入手

してこれを研究しようとしたらしい。それはあえて差支ないが、その一葉を僕に送つて来て「この経文の漢訳を写真にとつて送つてくれ」には驚いた。その経文はすぐ金光明王経だつたかと分つたと覚えてゐるが、事変最中の写真の不便な際にこんなことを言はれては困るの外なかつた。手写するのもおつくらだし、ぐづぐづどうしようかなどと考へてゐる内に、戦禍はバタビヤへも及んだので老先生どうなつたかなと氣になつた。たまに爪哇からやつて來た軍人に「俘虜の中にこんな人はゐないか」などと聞いても見たが、もとより分る筈もなかつた。終戦後爪哇はゴタゴタとしてゐるやうだが、老先生はどうなつてゐるだらうか。まさか靜かに西夏經典の解説に耽つてゐるわけにもいかんだらう。

爪哇なんかには隠居してゐるから余は和蘭人かと思違ひをして俘虜收容所の軍人に聞きたゞしたりしていたんだが、この思出草を書いた時分には既に逝世していただ。

余は多少の交際はあつたとは云え実は履歴は知つていなかった。そこで短い弔傳でも書く爲めに早速見

第二五〇号 目 次

卷頭言	矢口孝次郎(一)
Erwin von Zach(1872-1942)	石濱純太郎(二)
学内報	(三)
ヘンダーソン教授來学	——ジョンソン教授來学——
雜俳系稀觀書展示	——高塚講師渡佛——
國文学講演會	——計報——
學會出張	——人事異動——
學會開催	——
校友會常議員會	——三重縣支部再建總會——
布施支部結成	——昭八會——
秀麗會	——
翻譯てんやわんや	池田 榮(三)
陰符經について	高橋 盛孝(六)
學生	(七)
世界最大のヨット・レース	池垣定太郎(九)
日本考——シナ人の日本研究——	薮井 義正(二)
圖書解題(其六)	K・A 生(五)
バクスター著「信仰の生活」	デフォ著「神の法律によりて」
編集後記	

得る人名辭書百科事典など探索して見たが殆んど名が載っていない。只大ブロックハウスの補遺に短いのがあった。それによると、ウイーンの人で一八七二年四月十八日生れ、一九〇〇年から二十年までオオストリイの領事職務、バタビヤ住居、撰著は中國語滿洲語の字書と李白韓愈杜甫などの詩の翻譯がある。(Cf. Der Grosse Brockhaus, Ergänzungsband, 1935, S. 761a)。こんな程度である。我國のものでは流石に博

学の石田杜村先生の筆は老先生に及んでいる。「バタヴィア」には今フオン・ツァッハといふドイツ系の老學者が官途に在るが、この人は昔から支那の文学や滿洲語の勉強をした人で、よく歐人の編んだ支那語辭典に丁寧な批評を試みたことがあり、惡くいへば欠点の指摘に少しく急なるが如く思はれるがその方面からの貢獻も少くはない。近頃は「文選」の研究などをやつてゐるらしい。(石田静之助著、欧米に於ける支那研究昭和十七年東京創元社刊、七四頁を見よ。)今度の哈佛燕京本韓退之詩集訳の校定者ハイタワ君の序にはもつと詳しい傳があるかと予想したが是れ亦簡單であつた。「極東に於けるオオストリの領事職を十九年間勤務して一九一九年にバタビヤに離退して翻譯や他人の訳の校定や、より認められ又より幸運な地位に居る支那學者達と手厳しい批評の交換に余生を送つた」と云うに過ぎない。地味な學者だから別に特記することがないのかも知れない。或は欧米の雜誌にもつと詳しいのがもう出ているのかも知れないが余に便宜がない。論著については古く所は H. Cordier : *Bibliotheca Sinica* に著録されている。それにブロックハウス及びハイタワ序なんかに記載された署名、更に通報等に

出た札記書評等を補添すれば一応の論著目録を作製し得るかもしれないが、それでも随分手数をかけねばならず、今の所余にはその閑暇を持ち合さない。誰か便宜を有する人々に期待することとする。

彼の学界への貢獻は支那文学の翻譯であらう。韓愈詩集の如き全集訳を世に貽つたことは欧米学界でも珍しい。殊に理解に難しかろうと思われる韓詩を全訳するが如き試みは余程の自信と努力なくしては出来ることではない。序で乍らこのハイタワの校定本は韓愈詩集とのみ題してあるが、内容は韓詩全集の外に唐代詩人十一人の詩の選訳も含んでいるので、白樂天などは五十四首に及んでいる。彼は別に李太白杜子美の大部分を訳出しているのだから正に唐詩の通である。彼自身が唐詩の訳出に苦勞したから他人の訳には厳しい批評をする改訳をする。蓋し支那語の理解に苦勞した結果は人の小い過失も見過し兼ねるようになったのだらう。老漢學先生が若輩書生の読みぞこないを見過せないのと同じであらう。然し詩の翻譯は難しい。詩の本旨を異民族の言語に移し換えるにはいろいろの難点が纏綿する。ハイタワ氏はツァハ訳は漢詩研究者の爲めの訳で独逸詩としての訳でないと弁證している。それはそうであらうが、それだと言つて嚴しい批評が出れば他の訳者から異論の出るのも致し方ない。訳詩には附き纏う難題である。我國の如き直訳の読み方でも詩ではいろいろになるわけである。ツァハの批評改訳では中々面白い論戰が起つたものである。然しツァハが續々と支那の詩を訳出して歐洲学界へ貽つたことは支那学界への大なる寄與であることには疑いない。ツァハ老先生の自信に光ちた批評改訳は詩ばかりで

なく支那学の各方面に及んだ。遂には当時歐洲支那學者の大宗たる伯希和先生の善惡因果経の訳文の批評となつて通報第二十五卷第五冊に出た。(Einsige Bemerkungen zu Pelliot's *Sutra des Causes et des Effets*) ペリオ先生はこれを通報紙上に掲載するに當つて一々詳細なる補注を加えて弁難論議したもので、一時の盛観であつた。杜村先生が欠点の指摘に少しく急なるが如く思はれるがと評されたのもよく分るようだ。急なるがために大變な反駁に会わねばならなかつたのである。引き続き通報第二十六卷第二三合冊の *Notes bibliographiques* でペリオ先生はツァハ老先生を追撃して皮肉の言葉で嘲次つたものである。そのせいかどうかしらんが其後はたしか通報にはツァハの文を余り見かけんやうになつたと思ふ。然しこんなに精密に他人の論著を読んでくれる人のあつた歐洲の支那学界は祝福さるべきであつた。

ツァハ先生の滿洲語學はザハロフの滿蒙字書の批評札記以外には發展しなかつたらしい。又西夏文えの関心もベルンハルツ夫人との共著の一文に止まる。それも漢字構造の六書の知識の応用であつて同時に出了羅氏兄弟の成績があつては世に顧みられなくなるわけである。あの深い支那文獻の知識も支那語學には發展しなかつた。先生は恐らく言語學には興味がなかつたんだらう。所詮は唐詩を愛する漢學者であつたんだ。余は因らずも先生を弔する一文を草したが一面の識もない余に眷顧を賜つた先生に對し礼を失したかを恐れる。今後若し先生の論著を熟読するの機会を與えられるような事があつたら謹んで札記一篇でも撰して靈前に呈そうか。蓋し先生の志であらう。(文學部教授)

學内報

ヘンダーソン教授來學

カリフォルニア大学ヘンダーソン教授 (Eman D. Henderson) は六月十三日日本学千里山学会に來訪。親交ある春原理事、水谷教授の案内で学内を參觀後、以文館で川上法學部長、松田同次長及び学生を交えて数時間、日米の法學教育について談話した。

因みに同教授は漢文を読み、大阪弁も話す日本通で、アメリカン・パーク・アソシエーションの会員である。

(写真は当日図書館前で寫す)



ジョンソン教授來學

北米南部大学神學專攻のジョンソン教授 (Dr. Howard Johnson) 六月二十一日來學、実存哲學について一場の講演を行った。

(講演の要旨は次号掲載予定)

難併系稀觀書展示

六月二十七日午後三時から天六学会會

議室で関西諸大学の教授学生及関西古川柳学会の会員多数參集して本田溪花坊氏所藏の溪花莊文庫の難併系稀觀書の展示を催し、熱心な研究が行われた。

当日溪花坊氏は難波土產、奈良土產その他約百部を展示して解説され、特に全園に唯一部現存する柳樽一六七編原本、万句合原本等、貴重な文獻の展示を許され、參会者はこれから未刊の難併書の翻刻を希望し、氏はそれを快諾された。

高塚講師渡佛

本學文學部專任講師高塚洋太郎氏は、本學留學生としてパリ大学入学の爲七月十日海路出発の予定。

國文學講演會

関西大学國文學会では、五月十九日午後三時より、大学院に於て、左の通り講演會を開催した。

近世町人文化の生成

早大教授 岡嶋 康隆

西鶴に関する二三の問題

京大教授 野間 光辰

訃報

木下東作氏 本學員外教授木下東作氏は、去る六月十九日逝去されました。茲に謹しんで哀悼の意を表します。

學會出張

◇飯田正一教授並びに金子又兵衛教授は

五月十八、十九兩日天理大学・毎日新聞大阪本社で開催された日本近世文学會總會に出席。

◇松原教授は五月二十四日大阪大学医学部に於て開催の昭和二十七年産業教育調査近畿ブロック打合會に出席

◇森川太郎教授は六月一日、二日東洋經濟新報社主催の金融學會昭和二十七年度上期大会に出席

◇梶原秀男教授は六月七日及八日名古屋大学で開催された日本文學會大会に出席

◇田中照教授・藤本是助教授は六月七日八日兩日奈良女子大学で開催の関西哲學會に出席

◇飯田正一・吉永登教授は六月二十一日大阪女子大学で開催の日本近世文学會関西支部研究會に出席

訂正 前号本欄中森川教授出張に関する記事を取消します。

人事異動

昭和二十七年四月一日付

宇田 米夫

本學短期大学部專任講師に任ずる

昭和二十七年五月二十九日付

福田 宗次郎

小林 繁

昭和二十七年本學講師を委嘱する (各通)

學會開催

○関西大学國文學会では、五月廿五日、飯田正一教授・林和比古講師指導のもとに、伊賀上野に、芭蕉研究旅行を行った。參會社約四十名。

○関西大学國文學会では、六月十五日天六学会に於て總會を開催、吉永教授その他の研究発表を行った。

校友

校友會常議員會

六月十九日(木)天六学会に於て校友會常議員會を開催、会則改正並びに總會開催(九月十四日(日)大阪中央公會堂の予定)及び學校法人関西大学評議員選挙の件等について協議した。出席者は左の通り

會長 岡野昭次郎
常議員 阿部甚吾、大石雄一郎、加藤昌秀、櫻本信雄、志野覺治郎、下條小野右衛門、中務平吉、西村治三郎、西木寛一、森原源太郎、三島律夫、荒川太郎

三重縣支部再建總會

三重縣支部は昭和十年結成され其後中絶せるが六月八日(日)午前十一時より津市水産會館に於て再建總會を開催、參會者三十一名、小川成雄の開會の辭に始まり経過報告あり、次いで校友課長安

(十三頁)

翻譯てんやわんや

池田 榮

★ ★ ★

外出先から帰宅した新婚の夫が“*Oh, my dear wife!*”と云つたのを英語を知らない新妻が「お前でいやぢやない。」と聞いて怒つたとしても、また女子便所の掲示たる「御婦人用」の日本語をシナ人が「婦人を御する」といふ変な意味に誤訳したとても、單なる笑ひ話として聞き流せる。またドイツで便所の場所を聞いてそこへ出かけた江戸つ子が“*Herrn!*”とあるのを「(ヘレン) 這入れない」と読み、*“Herrn!”*とあるのを「駄目」と読んだと云ふのは單なる作り話しであらう。誤訳てんやわんやも早近な日常のことに關連してはこんなたあいまいなことに終る。しかし學問や宗教の眞面目な話や文學上のデリケートな問題に關して來ると誤訳の問題も必ずしも上の如く簡單に片附けられるものではなく、イタリーの諺に「翻譯者は叛逆者」(*Traduttore traditore*)とあるのが不幸にして當つてゐる場合も少くはない。こゝには宗教と法学に關する問題のうちから若干を拾つて見よう。

イエス・キリストの話されたのはアラマ語(シリヤ語)であり、ギリシヤ語又はラテン語でなかつた。而して最古の原聖書たるシリヤ語のベシッタ(*Peshitta*)が第一次大戦直後ベルシヤ領クルデイスタン(*Kurdistan*)の景教寺院廢址に於て英米探險隊によつて発見せられた。このシリヤ語聖書とギリシヤ語聖書を比較するに、先づギリシヤ語聖書中のマタイ傳一九章二四の「駱駝の針の孔を通るかた」は上のシリヤ語原聖書では「網の針の孔を通るかた」となつてゐる。シリヤ語の世界的權威である米国のジョージ・ラムサ(*George Lamsa*)はシリヤ語の「ガムラ」(*gaula*)には「網」と「駱駝」の二義があるから、ギリシヤ語聖書の上記箇所はシリヤ語からの明白な誤訳であると云つてゐる。またギリシヤ語聖書ルカ傳一三章一一の「病の靈につかれたる女はシリヤ語原聖書では「リュ・マテスにかゝりたる女」となつて居りラムサはシリヤ語「ルーハ」(*rûkha*)が「風」と「靈」と「リュ・マテス」の三義を有してゐると記してゐる。なほギリ

シヤ語聖書に「男の女に触れぬを善しとす」(*コリント前書七章一一五*)とあるところはシリヤ語原聖書には「夫の時々妻と親近せざるを適切とす。」とあり、シリヤ語原聖書は結婚を神聖と解し、ルーテルの新教精神を支持するに反し、ギリシヤ語本は結婚を本來罪惡視するが故に、この場合「翻譯者は叛逆者」である。なほ、ラムサは上述の外に多くの誤訳及び改訳がギリシヤ語聖書中に存することを指摘し、ラムサによるシリヤ語原新約全書的全英訳が既に米國で出版せられてゐる。

★ ★

佛教で用ひられる梵語の「アヴァローキテシユヴァラ」(*Avakīśvara*)は玄奘三藏以前の旧訳では「觀世音」とか「觀音」とか云ふやうに訳されてゐるが、玄奘以後の新訳では「觀自在」とされてゐる。しかし梵語の「イーシユヴァラ」が「自在者」の義を有するから、一般に認められる如く、旧訳の「觀世音」と「觀音」は誤訳である。しかし、たとへ誤訳に基づくと云へ、この二語は觀音經に示された觀音の働きを示すに適切なものであり、また長い間、シナや日本で用ひられて來たから、今日決して排斥すべきではなからう。

★ ★

英國憲法史上、特筆すべき大憲章(*Magna Charta*)第六〇條と第四一條の

“*consuetudines*”は土橋友四郎氏がその著「世界各國憲法」(上杉愼吉教授序文、有斐閣發行)に「慣習」と訳し、關西大学の矢口教授、慶應義塾大学の占部教授も同じ訳を採り、大憲章第一三條の“*liberas consuetudines*”を土橋、矢口、占部氏の三氏が「自由なる慣習」の意味に訳し、一般にそれらの訳語が正当であるとせられるに拘らず、最近現れたある訳文に於ては上の第六〇條及び第四一條のラテン語が「関税」と訳せられ、第一三條のラテン語が「自由な関税」と訳せられてゐるやうである。しかもこの同一訳者は英國の權利請願(*Petition of Right*)第三條が大憲章に關して用ひた“*free customs*”を「自由なる慣習」と訳してゐると聞く。この訳者が矢口、占部、土橋三氏の上記訳語と異なる訳語をとつたのに特別の理由がありとすれば、是非それを知りたいものである。

次に大憲章第三九條の“*legem terrae*”は“*ius terrae*”に等しく、それは決して「土地の制定法」又は「國の制定法」を意味せず、従つてそれを「國の法律」などと訳して第三九條によつて「法律なければ刑罰なし」(*Nulla poena sine lege*)の罪刑法定主義そのものが規定せられると解することは出來ない。上の語は「國法」と訳すべきであらう。

(法學部教授)

陰符經について

高橋盛孝

一、成立ち

この本は古くから偽書だと云われている。四庫全書の総目録一四六、子部五六道家類に陰符經解一卷、宋朱子の同じく考異一卷、宋夏元鼎の講義四卷が録せられ道藏其他の叢書類には外に数種の注解の名が見える。著書は不明で集仙傳に始めて、唐の李筌が嵩山の虎口巖石室でこの書を得た。題して曰く「大魏眞君二年七月七日道士寇謙之これを名山に藏し、もつて同好に傳う」と。已に糜爛甚しく、数千回くりかえして読んだがその義を曉らず、後魏山に於て老母に逢い微旨を傳授されたので、注を書いた。というのである。提要にも「その説怪誕信ずるに足らず」と云つてゐる。黃庭堅、朱子等も筌の僞託としてゐるが、朱子は「然れども時に精語あり、道に深きものならでは作ること能わず」と云つた。私が心をひかれたのもその爲である。

光緒甲午年十月、芸文書局版の漢魏叢書（陸軼）に陰符經があり、旧本には黃帝撰とあり、太公、范蠡、鬼谷子、張良諸葛亮と李筌六家の注があり、節毎に大抵一家の注をとり、且、節毎に注者を異にしている。頗る世に云う集解、集注の類と異る。これについて狩野博士が「これは、こう云う人々の靈感を受けて注を書いたのだ」という意味のことを講義で云われたが、誠に卓見である。唐志に録した本書には十一家の注本がある。

世に緒遂良の写本が傳つてゐるが、明文微明に至り忽然として現れたもので、眞僞の程、定かならず、「烏んぞこれをもつてこの書の眞僞を定めんや」と提要云う。

古來陰符經の名は諸書に見え、兵家言、道家言のいずれかに取りあつかわれてゐる。兩種の傳本があつた様にも受取れるが、今の書物は兩方の思想を混じ、最後に或る傳本では陰陽家言を附している

が、漢魏叢書本には脱している。

二、内容

上中下三篇に分れ、全部で四百四十四字（多少の出入あり）、よく道の枢機を道破している。文字も亦頗る奇抜である。中篇に「天生天殺、道之理也」。（天はものを生かし、又殺す。これが道の理である。）と云つて次に「天地万物之盜、万物人之盜、人万物之盜、三盜既宜、三才既安」とある。天地は物の盜人であり、万物は人の盜、人は万物の盜だと云うのである。人間は万物を殺して生命をつないで居り、天災は人間を亡ぼし、人間は天然資源を乱獲する。みんな盜坊行爲である。三盜がそれ／＼心ゆく迄盜みをはたらけば天地人三才は安らかになると云うのである。西洋の哲人が「人は人に対して狼である。」Homo homi lupus.と云つたが、これ程徹底した説は外には見えない。上篇には「天に五賊あり」とも云つてゐる。又「人はその神の神たるを知り、不神の神たる所以を知らず」と云う。神靈不可思議な事に対しては目を見はるが、平凡な事こそ、不可思議であるという事を世人は知らぬと云う意らしい。

下篇は一層難解だが、こんな事を云つ

ている。「生は死の根、死は生の根、恩は害より生じ、害は恩より生ず。」そのときはひどい仕打と天を怨むが、あとでゆつくり考えて見ると、天恩の厚きを思うこと屢々である。又「人は愚を以つて聖を蔑れ、我は不愚を以つて聖を蔑れる」愚人はむやみと聖を畏れるが、自分は、聖の聖たる所以を知つて且つ之を畏敬する。「人奇を以つて聖に期し、我不奇を以つて聖に期す」人は聖人に奇蹟を期待する。しかし聖人は常に平凡である。何等の奇蹟も行わぬ。それでこそ眞の人間である。

結びの句として「是故、聖人知自然之道不可違、因而制之、至靜之道、律曆所不能契」とある。自然の道、至靜之道を強調し、聖人はこれによつて民を制する。至靜の道は永遠につづく。こよみできざむ能わざる所と爲すのである。

以上不完全乍ら、一斑を御紹介した。志ある士は原書について更に妙趣を汲んでもらいたい。こんな事も云つてゐる。盲人は耳が特別によく聴こえ、聾者は善く視る。「利の源を絶てば、用師十倍」軍を十倍の力に活用し得る。何事も欲があつては成功しない。こんどの戦争も、結局利の源を絶ちえなかつた所に敗因があるわけだ。（昭二七、六、十二）

（文學部教授）



体育各部の春季シーズン中、種々の競技場観覧席に、赤黄白の三色の長流旗に墨黒々と、必勝関大と記された三本の旗を見かけた諸君も可なりあると思う、これは、応援團の造つたものではない。旗の主は、本学専門部昭和五年卒 谷口政一氏（中河内郡巽町矢柄二八）であり、氏の母校愛の熱情が、この三本の旗になり、西宮に、藤井寺に、日生球場に鑽えつてゐるのである。（以上体育部長橋本談）選手諸君は、諸君の競技の蔭に、このような多くの先輩があることを考えて敗れて悔のない試合をして欲しいものである。

◎籠球部 六月十三日より三日間、神戸市で西日本総合籠球選手権大会が開催されたが、出場三十二チームの間に熱戦が展開され、実業団、クラブチームの強豪を破つて准決勝には、本学、関学、神大、同大の四大学が勝ち残り、次の成績で本学が優勝した。

准決勝

本学 44 (2618-1924) 43 神大
タイムアップ寸前まで勝敗の決らぬ熱戦となり、半ゴール差で勝つ

本学 62-59 立命大

本学は前半の速攻が功を奏して、有利に試合を進め、後半同大の追込みを振り切つて勝つた。尚、六月二十六日より五日間西宮体育館に於いて舉行された第二回西日本学生選手権大会にも臨み、総合選手権三年連覇の余勢をかつて優勝した試合成績は次の通り
一、二回戦は問題なく、準々決勝戦は立命大と対戦、前半既に倍以上の得点差



(寫眞は同氏を圍んだ応援団幹部)

に、後半戦は新人達の練習試合とし、全メンバーを落したため得点差を縮められた。

準決勝は、ダークホース大阪府大と対戦、速攻同志の熱戦は、タイム・アップ寸前まで勝敗決まらず、大市大のチームワークが僅かに優れ、三点差で敗れるかに見えたが、タイム・アップ十一秒前に同点に追い着き、両軍のオールアタックに場内騒然、市大ゴール下の混戦は、市大側に反則あり、2フリースローを得た時は三秒前であつた。第一投はアウトで得点ならず、第二投ゴールなければ当然タイムから云つて延長戦になる筈である。

C 中井の第二投に満場の視線が注がれる中に、ゴール、こゝに一点を加え、市大ボールを奪ると同時にタイム・アップとなり、選手も応援團一同も欣喜する劇的一戦であつた。

本学 65 (2936-2737) 64 市大

最終日決勝戦は京大と対戦、これも前日の市大戦同様の熱戦となり苦戦した、即ち、京大の速攻戦のペースに乗せられ、京大の巧みなチームワークに、ボールを奪われ、タイム・アップ一分前、笠井の突込みよくボールをカットし、ノーマージでゴール、こゝで勝越し、ついで中井のシュートに止めを差した、時に二十

三秒前、更に京大ボールを逸してマイボールのまゝオールアタックの混戦に京大の反則がつき終にタイム・アップとなる。

本学 42 (1527-1226) 38 京大

本学は全体に個人技が目立ち、試合が荒く、長身者揃ひの癖にフオロも悪くて終始苦戦していた、今後はチームワークとフオロに一段の精進を期待したい主要メンバーと、多く活躍した新人は次の通り

東村井宅井 口川庭勝石
大木中三笠 人 江瀬伊宮稻
レギユラー F C G 新 F C G

◎体操部 六月十四、十五日の両日大阪YMCAに於て西日本学生体操選手権大会が開催され、連盟加盟一年にして二部で優勝、総合得点に於ては一部の三位より得点が多かつた殊に新人戸田勝也は個人優勝したが、その技術は將來のオリンピック候補とすら、囑望される声さえ聞えた。成績次の通り

出場者 大杉秀二、白石卓三、戸田勝也、門口雅郎

個人総合優勝 戸田勝也 九三・三〇点
入勝五位 大杉 八六・八五点
六位 白石 八六・三〇点
種目別入賞 (二十点満点)

六位までの入勝表彰状は二十一枚の多きを数えた。(カットは体操部白石の鉄棒、習真は体操部白石、戸田、門口)



◎馬術部 本シーズンの終幕を飾る東都三大学との定期戦は、東都の雄慶応大、法政大、日本大の三校を迎え、六月十八日、二十三日、二十五日、大阪櫻川馬場で挙行し本学の全勝するところとなった。成績及び出場者出場馬は次の通り

勝 本学	264	-276	慶応大	差	12	(減点法)
宇山	24	〇	(三)	陽	稲垣	75 ×
三宅	85	〇	(ロツキ)	佐藤		113 ×

鉄棒	二位	白石	一六・三点
平行棒	一位	戸田	一六・八点
〃	二位	白石	一五・一五点
〃	三位	大杉	一四・七五点
鞍馬	一位	大杉	一五・一点
徒手	二位	戸田	一六・七五点
吊環	二位	戸田	一六・三点
跳馬	二位	戸田	一六・二点

中井 17 〇 (ラツキ) 坪井 -58 ×
池永 6 △ (ロツキ) 大島 -6 △
河畑 128 × (一) 月 森村 -18 〇
宇津 4 〇 (秀) 龍 桑田 -6 ×
六月二十三日 〇 本学 142 - 法政大 258 × 差 116
六月二十五日 〇 本学 228 - 日本大 262 × 差 34
対日大戦は最後に騎乗者本学池永のゴールまで勝敗の決まらぬ試合で、池永の完走を待つて始めて試合が決定すると云う接戦であつた。

◎拳斗部 待望の全日学生選手権が、六月二十一日大阪ブルーで挙行された、軽量級は本学に有利、重量級は明大に有利、五分五分と豫想せられた試合であつたが、ジュニアの河戸が負傷欠場のため、チーム構成に大きな影響を及ぼし勝てる試合を失なつたのは惜まれる、フライ橋本、ベントム福本は危気なく、ベントムから二階級減量した長谷川は、減量が響き善戦しながらスタミナを喪つて敗れ、フエザー成瀬も前半有利に試合を進め勝つたと思われたが、スリーラウンドにスタミナなく、前半クリンヒットがなかつたことも判定負の結果を招いたのが痛かつた。ライト小坂の健闘は称される明大フエザー福沢、ウエルター藤本両チヤンピオンは、さすがに強く、巧みなテクニクに、本学岡部、西尾も歯がたゝ

なかつた	本学	明大
ジュニア	× 長谷川	判定 鷺尾 〇
フライ	〇 山下	判定 田中 〇
〃	〇 橋本	〃 河野 ×
ベントム	〇 福本	〃 大久保 ×
〃	× 高島	〃 〃
フエザー	× 成瀬	〃 〃
〃	× 岡部	〃 〃
ライト	〇 小坂	判定 佐藤 ×
ウエルター	× 西尾	〃 藤本 〇



◎フエシング 関西リーグ最終日、対同志社戦に敗れ優勝を逸した。
サibel × 本学 8 - 18 同大 〇
これで本学はフルーレに優勝、来月十二、十三日の東西対抗に出場の資格を得

たが、エツベ、サibelは同大の優勝となり、全種目で七勝二敗の二位であつた種目別個人優勝では本学千島主将がエツベとサibelの二種目全勝の最優秀成績を挙げた。
◎送球部 第四回 対法政大定期戦が六月十四日、本学グラウンドで挙行された過去の戦績は二勝一敗で本学の勝越であつたが、当日、相憎の雨にグラウンドコンデション悪く雨中の熱戦も、本学ゴールを再々逸して敗れた

× 本学 4 - 8 法政 〇

◎園藝部 春季阪神五大学リーグ戦が六月一日、日本棋院に於いて挙行せられ本学が優勝、毎日新聞欄を受領、続いて六月八日、日本棋院京都支部に於いて関西地区決勝戦を京大との間に行い全敗した、各成績次の通り

〇 本学	3	2	阪大 ×
〇 〃	4	1	関学 ×
〇 〃	3	2	市大 ×
〇 〃	5	0	理大 ×

関西地区決勝戦
本学 × 田中 八目半 〇 藤井 京大
× 新宮 一目半 〇 鈴木
× 山崎 中 押 〇 山田
× 田島 中 押 〇 大井上
× 西田 中 押 〇 水谷
◎二部世界文学研究部 昨秋第一回文
(二三頁)

世界最大のヨット・レース

池 垣 定 太 郎

北欧の地ヘルシンキを中心に、鉄のカーテンの内外を問わず世界の各國から有名無名の選手が集い、暫し冷戦を忘れて繰り上げる平和と美の祭典、オリンピックの日も近ずいてきた。わが國から、この檣鉦台におくる一〇一名の派遣人員も水泳を最後に本極りとなり、離航した資金調達もどうやら目鼻がついた様であるが、わが代表陣は、それぞれの競技種目に離航することもなくすぐれた成果を収めて、新生日本の意氣を世界に示して貰いたいものである。日本が最後に出場したベルリン大会は、もはや十六年の昔語りになつたけれども、「前畑ガンバレ」の感激は、われわれ戦前派オールド・フアンにとつて、まだ脳裡に鮮やかなものがあつた。しかし、戦前派でもわが國がベルリン大会に初めて、ヨット選手を二名送り出したことは記憶するものは少ないかも知れない。それは、初めての出場で、さしたる成果も挙げ得なかつたせいもあるが、由來、ヨットレースは一般公衆にとつて興味を持たれ難い種類の競技に属するためである。

ヨットレースは、陸上や水上の他の競技と異なり、競技場が広漠たる水面であり、競艇が観客の視野の外に出ることも多く、全競艇が接近して帆走する場合、スタートラインを横切る時のほか、マークを廻航する時に限られマークからマークの間は広範囲に展開するため、その進行中の勝敗の判定は素人には困難であり、たまに二艇が接近しても、ルールの予備知識がないと、その場合の艇の行動が理解しにくいことが多いのである。ルールは、一見複雑に見えるけれども、実は簡単な三つの根本原則の上に立つてゐるもので、かの萬國に行はれる船舶衝突予防法と同趣旨の規定が競技化されたものにほかならない。即ち、(1) 風上艇は風下艇を避けるべし。(2) 左詰開き艇は右詰開き艇を避けるべし。(3) フリーに風を受ける艇はクローズホールド艇(出来るだけ風上へ進まんとし、て帆を一折詰めて切り上りつゝ帆走する艇)を避けるべし。――の三個の原則であつて、これだけでも知つていれば、ヨットレースの見方違もつてくる

と思われる。この度のわが國オリンピック選手の中にも一名のヨット選手(岡學O・Bの海徳君)が含まれているが、とかく見落され勝ちなヨット代表が、北欧の海に孤軍よくどこまで奮闘するか、暖たかい眼で見守つてやつてほしいと思ふ。



北欧といへば、世界ヨットの起源の地である。北海の怒濤を飜いて、南方豊饒の地を求めて押し渡つたVikingそこに最も古い海の民を見出す。Vikingといふ、海の民という時、イギリスもまた忘れることの出来ない國である。イギリスは、女王の治世に必らず

隆盛になると信じられており、エリザベス女王の即位は國民に歓迎されているが、唯一つ海國民のイギリス人にとつて残念なことは、女王が海は大嫌いだということであるという。しかしこれは、英國歴代の王室にとつては珍らしい例外であり、代々の國王が海と船に対する愛着は並々ならぬものがあつたらしい。特にジョージ五世は熱狂的なヨットマンとして知られ、Britaniaといふ名の航洋ヨットのオーナーであり、屢々レースに出場し、自ら親しくその舵をとられたのであつた。オリンピックのヨットレースは、國際六メーター・クラス、スター・クラス、ドラゴン・クラス等の比較的小型艇で競技が行われるが、このブリタニヤは超大型艇であり、水線長七十五フィートもあつて、その操縦には専門の水夫を含めて二、三十人の乗組員を必要とするものである。そのレースは海洋に、長距離に亘つて行われ、時には自力で大西洋を渡航して、彼岸で行はれるレースに参加する。

この種のヨットレースで最も有名なものは、大西洋を挟んで、英米兩國の間に、百年の永きに亘り、兩國の造船技術、競艇技術の粋を盡して、闘かわれたアメリカ盃(Americas Cup)といふ

うのは、イギリスの Royal Yacht Squadron が国際レースの爲に提供した、價百ギニーの豪華な純金のカップであるが、一八五一年、このカップ争奪戦にはばるアメリカから参加した全長百二フィート、百七十噸のスクーター America が多数のイギリス競艇を退ぞけ、アメリカに持ち帰り、後、America のオーナー達が New York Yacht Club に国際レースのトロファイとして寄贈したものである。このカップをめぐり、一九三七年まで十数回の国際レースが英米の間に展開せられたが、常にアメリカがイギリスの挑戦を退ぞけて守り抜いたのである。國を挙げての熱狂のうちに、時には兩國民間の氣まずい感情の原因にもなり乍ら殆んど一世紀に亘り開かれた十数回のレースの内、特に有名なのは、二十世紀に入つてからの Sir Thomas Lipton の五回の挑戦である。リプトン卿は紅茶王としてよりほか、わが國人にはあまり知られていないかも知れないが、彼はこのレースのために次々と新艇を建造して巨万の富を惜しげもなく費消し、アメリカ人から、*"The World's best loser"* という愛称をもつて呼ばれた人である。最初はアメリカカ盃レース以外にヨットスポーツに大した興味も持たなかつたが、すぐにヨツ

チングのチャームに捉われ、最も有名なセーリングマンにもなつたのであつた。

彼の最初の挑戦艇は Fife によつて設計された Shamrock 号であつた。

シヤムロックはアルミニウム製の船体と甲板、鋼鉄のマストによつて極力重量を減じ、抵抗を最少ならしめる様に設計されてゐた。これに対しアメリカ側は、Pernon Morgan 主宰するシンジケートの所有、Herreshoff 設計の Columbia 号を以てした。コロンビヤはアメリカカ盃レース艇中、最も美しい船といわれ、競争艇として優秀な性能を発揮した計りでなく、後、第一次世界大戦のとき、ドイツ潜水艦の封鎖戦術によるアメリカ船舶の消耗に際し、輸送船として活躍するに耐えた優れた艇であつた。

この両艇によるレースの最初の五日間はすべて、制限時間内にゴールすることが出来ず勝敗が決まらなかつたが、続く数日は風が出て、第一回にはコロンビヤが十分八秒の差で勝ち、第二回はシヤムロックが強風にトツマストを飛ばしてレースを退ぞき、第三回目

にまた、六分三十二秒の差でコロンビヤが勝ち、遂にアメリカ側はトロファイを守る事が出来た。この試合で双方のオーナーは共に、当時の金で、四

万五千ポンド乃至五万ポンドを消費したといわれる。

一九〇一年、リプトン卿は、この度は Watson 設計の Shamrock II を以て挑戦して來た。アメリカ側は、依然

優秀性を發揮していたコロンビヤを以て迎え、三回のレースに、それぞれ、一分二十秒、三分三十五秒、四十一秒の差で辛勝したのである。レース後、Shamrock II は直ちに解体された。レースのほかの目的には役に立たない艇だつたから。

一九〇三年、Shamrock III が再び Fife により設計せられた。この度はリプトン卿が勝つかと思はれたが、アメリカ側、Vanderbild のひきいるシンジケートが設計を依頼した Herreshoff の天才はよくこの恐るべき挑戦艇を蹴したのであつた。Herreshoff の艇は Reliance といふ、長い張出を持つた平底船首部と、狭い船体の、全くのアメリカカ盃レース用艇であつた。リプトンはライアンス型の艇を新造させようとしたが、アメリカへの渡航の危険を考えたイギリス設計者はこの依頼に応じなかつた。平底型の艇はアメリカ人すら、アメリカカ盃レース以外のレースにはその使用を禁じていた位である。そこで両者の間に話合が進められ、以後ユニバーサルルールによる racing—七

十五フィート—の艇を用いることに定まり、レースは同一條件による艇の設計建造競争となつた。

第一次世界大戦終了後、一九二〇年リプトン卿の Shamrock IV は、アメリカ側の Resolute と相まみえることになつた。レンリユートは、後年アメリカ海軍長官になつた C. F. Adams が舵をとり、シヤムロック四世は Sir W. P. Burton が操縦した。結局、この回も三対二でリプトン卿が敗れた。

四度敗れたリプトン卿は、更に一九三〇年に、Shamrock V を新造、挑戦を試みた。アメリカ側は、Starling Burgess の手になる Enterprise を防禦艇に選定し、またも、四回のレースを完勝したのである。エンタープライズは、すべての索具が、ロープの緊張度を計る計器附のウインチを備へつけた甲板下に取り込まれる仕掛になつており、軽量のジュラルミン製のマスト、Park Avenue boom とあだ名される幅広のブーム（帆の下桁）と完全な帆の一組を備へていた。

この五回目の挑戦の後二年して、リプトン卿は遂に病魔に侵されるところとなり、不屈不撓のジョンブル魂をうたわれ、*"World's best loser"* と愛称されながら、恨を残してこの世を去つた

(次頁下段)

春風過嶺

阿索密多里山外麓而深氣霞客而讀木失
子革尼外打而春風

(切意) 侵晨山頂 春霞罩籠
嶺頭過去 設設春風

憶摘校花

山大革密枯木以尼密由而校花心那由氣
天和賴奴虛木乃失

(釈音) 虛木乃失日西 (ひもなしヲ「日
も西」ト誤解)

(切意) 高山雲影罩 渺見校花
心欲伸手摘 紅日又西斜

摘花遇雨

校革里挨迷外勿里氣奴和乃失古活奴而
禿木在那革計爾羊多賴奴

(釈音) 羊多賴奴不舒 (宿らむヲ「睡
れぬ」ト誤解)

(切意) 摘校逢暴雨 衣衫左右濕
花下地席緣 淋漓睡不得

樵子偷桃

密之那骨那識那勿那校和里所葉天答景
其外和日氣春那山人

(釈音) 密之那路 骨那傍 (みちのく
ヲみちの傍ト誤解)

(切意) 識而勿那看見 和日氣重
負薪春樵 路傍偶見校桃

摘子又摘 担重難桃
全文盡ク誤解 風趣ヲ解セザ
ルコト夥シ

春野採花

君革密春那野尼出花和多乃我衣鉄白
雨尼奴里子子

(切意) 春野爲君出 纖把校折
採花遇春雨 我手衣袖濕

原歌は古今集卷一春歌山の仁和の帝
の歌であらう、口訛による誤傳であ
らうが意味の無い事になつて了つた

夏出天二十三夜那月埋子多人尼外由戸
候君和箇所埋子

(切意) 夏天二十三夜、等候君 入前
假設這里候月出 (字語顛倒意
只在此)

偵人摘梅

君乃賴鉄打里爾革密設奴校花以路和水
革和木識而人所失而

(切意) 梅花顏色誰人見 香氣引君至
此 看知昔者拳手攀

心命相連

命打尼心尼客乃物乃賴白何革外界里
那革乃失革而別紀

(釈音) 乃賴白相連 (ならばヲなら
ぶト誤解)

(切意) 性命心相連 物々皆容易
何時若分開 不苦苦自來

相期不候

我乃賴白鶴乃骨復多木理子別紀尼和慕
外捏白箇所埋多里密所思而

(切意) 我約約鷄鳴須索等緣何失信你
就睡見不再思

世別清渾

世中那人外何多木以外失水四密尼過而
和白神所失而賴奴

(切意) 世中好多人難分別如水混清渾
惟有神知識

暴風驟落

村雨外只革里所密那物所革失所那密那
革索和所箇尼奴氣和計

(切意) 病如村雨暴 瘡脫病無妨
天晴棄了傘 瘡脫病無妨

武藏無山

木索失野外月那入別紀山木乃失革搖里
出鉄革尼箇所入

(切意) 武藏州 無山島 (別紀ヲ島ト
誤解)

月出田野草

以上の様な和歌の識三八百その他山
歌六首雜唱小曲六首をあげている。山家

とは俳諧の類らしく判読に苦しむが一二
を示すと

少女別郎

壽西之法之禿捏的奈奈路路外坦瀉鳥溪
骨節那密辭薄乃立探那(ヨノ、とは合
の手か?)

(切意) 十八九才女幾相合就離流萍無
水義志得久在世

青春嘆世

壽西之法之外勿達單皮所六格革里氣尼
法乃挨(格の誤) 殺雞雞路隔搖那

(切意) 十七八時難算二次好比枯木殘
花霎時又是一世

雜唱小曲

品に属するので省略する。
撰者李言恭は字は惟寅、秀巖と号し、
明の万曆二年の臨淮侯、總督京營戎政の
職にあつた。王鳳洲李滄溟等と共に海内
十才子と称せられた詩人であり殊に日本
事情に通じてゐたと云はれる。郝杰は字
は彦輔蔚州の人、協理京營戎政の職にあ
つた。云はゞ本書は倭寇防禦を目的とす
る衛戎司令官の著書なのである。

大体シナ人の日本研究は日本人のシナ
研究に比して極めて数が少く、歴代正史
に僅か東夷としての一條を存するのみで
云はゞその存在を認めて居ない程であ
る。所が倭寇の勢力は自ら対日意識の高
揚を余儀なくし、自大主義をすてて東夷
日本の研究を急いだもの様である。明
代の日本研究はこの外に前後日本考略三
卷日本寄語一卷鄭若曾日本圖考二卷海
國縮十三卷侯繼曾日本風土記四卷宋忠昌
経略復國要編十四卷等がある。要するに
シナ人の日本研究は一に我國の勢力の消
(次頁下段)

(前頁より)

井章吾氏より祝辭並びに母校の近況報告
出席会員の自己紹介、議事に入り支部会
則を決定し、小川成雄氏を支部長に選任
の上副支部長、幹事は支部長に一任とな
り、後日選衛通知に決定し、懇親会に移
り懐旧談に情一入であつた。名残り盡き
ぬ儘に學歌齊唱、万才を三唱して午後五
時散会した。出席者左の通り

布施支部結成

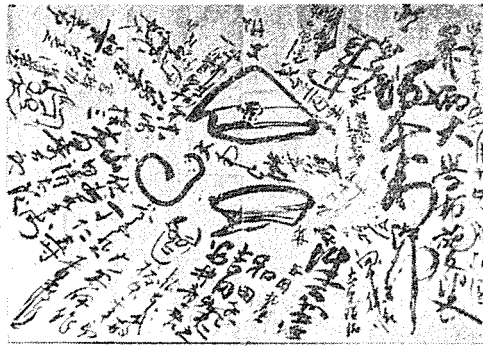
かねて有志により計画中であつた校友
会布施支部は機熟して六月十四日午後五
時布施市内小阪松園で結成、懇親会を開
催した。まず会則を定め、支部長、副支
部長、委員が決定され、續いて自己紹介
に入り母校を想う熱ある寸言も加えて終
始なごやかにうち過ぎ期せずして學歌齊
唱の議おこり一同感激の声を和した。八
時過ぎよせ書を完了して大学及び支部の
万歳を三唱し散会した。尙当日の出席者
左の通りである。(寫眞は当日のよせ書)

大學側 和田理事、安井校友議長
支部側 坂本万次郎(支部長)、廣田郁雄(副支
部長)、森島(副支部長)、谷田壽十郎
城戸盛雄、中井淳一、竹刺寅之助、福
岡彰郎、榎本金次郎、上田虎雄太、和
田二郎、黒田壽美雄、水野二郎、竹田
達郎(以上委員)、谷岡登、丁仁壽、

千里山昭八會

六月二十四日(火)午後五時半より大
阪駅日本食堂特別室に於て六月例会開催
今回は中村良之助先生を迎え且つ十名以
上の新顔の來会を得て懐旧談に花を咲か
せた、闊病二年克服の浦野氏元氣な顔を
見せてくれたことは嬉しかった、三十名
を越す盛会となり一同大いに歓を盡し午
後八時半名残を惜しみつゝ散会した。出
席者左の通り

中村良之助、山尾義泰、大島武夫、外山英一、高



美坂正利、田中勝治、上坂明、伊藤武
夫、青木修、宮越功、深田保美、本田
秀太郎、山田清太郎、治島繁雄、武田
黒一、伏谷吉兵衛、瀧住光二、東崎拾
三、大谷伊作、川澄欣一、大崎京、吉
田秀之、松本武敏、川田比次、石田和
男、後原昭賢、櫻田雅俊、泰里滋治
(順序不同)

秀麗會第二回總會

大阪府下公私立小、中、高等学校に奉
職する本学出身教員によつて組織する秀
麗會第二回總會は六月二十九日(日)午後
五時より天六学舎三階校友課会議室に於
いて行はれた。

副会長戸川一雄氏(浪速西中)の司会
により名譽会長岡野学長先生、本会会長
神保敏男氏の挨拶に始まり、本会成立の
経過、会計報告、議事「評議員候補者と
して会長、副会長の二名を決定、新卒業
生の学校就職斡旋について」を経て懇談
会に移り午後八時なごやかな中に本会を
了した。出席者四十八名左記の通り

(順序不同)

三宅 定一中(濱小) 坂口 良一(鶴江小)
久保 義明(忍頂寺中) 岩崎 猛(南中)
戸川 一雄(浪速西中) 足立 信治(旭東中)
石原 康雄(平野中) 穴吹 裕雄(今富中)
高月 正雄(十三中) 今倉 給榮(島中)
市道 正雄(十三中) 岸田 憲治(南後中)
鶴岡 慶一(城南中) 松岡 展登(浪速西中)
上中 進夫(三國中) 中田 朝雄(三國中)
高岡 茂三(三國中) 西辻 展夫(三國中)
楠 正井(三國中) 青田 博次(三國中)
平山 芳明(三國中) 石岡 壽幸(旭東中)
小田 健(旭東中) 淺井 孝(旭東中)
小村 茂(旭東中) 平井 (旭東中)
瀧川 一雄(市立工藝) 小野 氏郎(天二館)
松本 実造(武庫高) 山本 和夫(西野田工)

島田 繁(居町二館) 井崎 政(市立工藝)
栗林 茂南(二館) 坂田 倫夫(城東高)
神保 政雄(都島工) 田中 正巳(居町高)
川瀬 茂都(都島工) 廣島 昌夫(天二館)
重本 利一(東工高) 堀 力男(天二館)
四辻 登(大高) 藤本榮治(大高)
星野 信夫(大高) 長谷川雅樹(大高)
栗駒 正和(大高) 黒岩 博(大高)
半井 浩(大高) 片岡 正治(大高)

(八頁より)
藝講演会を開催した処、世上多大の反響
を呼び後援朝日新聞社よりの要望で第二
回文藝講演会が六月二十八日朝日新聞社
講堂で開催され、前回以上の聴衆が会場
を溢れるほどの盛会であつた、殊に女性
聴講者や一般聴衆が、学生層より多い位
であつたことは注目される

挨拶

飯田本学教授
新劇の動向 辻部本学講師
現代フランス小説 伊吹京大教授
現代文学の意欲 荒正人氏

◎二部近代文学研究部 文藝講演会を
機会に、評論家荒正人氏を囲むで、翌六
月二十九日森宮労働会館で文藝座談会を
開催、現代文学に就いて、荒氏と懇談し
た。

(二頁より)

長に基くもので清末には近代国家の範を
取らんとし、民国に入つては西洋學術の
先進国として日本研究が旺に行はれた。
敗戦後の日本が將來閉ぢられた中国と交
を新にする時、彼の人士の日本研究が如
何なる形を取るか、翼くは取つて飽とす
る所があり慈々盛に日本研究が行はれる
様に努め度いものである。(文藝部教授)

本學 重要図書解題 (其六)

10. バクスター「信仰の生活」ロンドン

一六七〇年刊 一冊

Baxter, Richard: Life of faith.
London 1670.

著者バクスターは、英國長老派教会の神學者で、一六一五年に生れ、初めは宮廷に仕えたが、後、聖職に就いた。清教徒革命の際には議會軍を後援し、クロムウエルの顧問にもなつたが、後には轉向して王政復古に盡したのである。一六九一年歿した。

論者として活躍した彼には、多數の論文著作がある。中々 Aphorisms of Justification(1649) The Saint's Everlasting Rest (1650) は著名であり、自傳として Reliquiae Baxterianae (1696) は有名である。一八三〇年に、選集 Practical Works 二十三冊が出版され、Orme の著わした彼の傳記書は代表的なものである。

本學所蔵の「信仰の生活」は、三部からなつてゐる。一、「ハブル書Ⅰ、Ⅱについて」の説教(かつて國王に御前講演し王命によつて出版したもの)で短かいもの、二、「キリスト教信徒を遵奉せしめるための指図」は九章に渉り、三、「如何に信仰に生き、如何に凡ての場合に行うかの指示」は二十八章に及んで、本書の大部分を占めてゐる。大きさは四六判と菊判との中間で、総革製、本文六〇七頁、各頁は小さな活字で満ちてゐる。

卷頭に彼の親友であつた英國の大蔵大臣ハンパデン (Richard Hampden, 1631—1693) 夫妻への献辞があり、卷末には彼の著作目録があつて、五十四部が掲載されてゐる。

11. デフォオ「神の法律によりて」

ロンドン 一七〇六年刊 一冊

Juste divine, a satire, in twelve books, by the Author of The True-Born-Englishman, London 1706.

デフォオ (Daniel Defoe, 1661—1731) は、英國のジャーナリストであり、近代小説の祖として、特に「ロビンソン漂流記」の著者として有名である。一六六一年頃にロンドンの肉屋、James Foe の子として生れた。後に Defoe と改姓したのである。彼は初め商業を営んでゐたが、政治に多大の興味を持つてゐた。そして諷刺詩や政論を執筆し、新聞雑誌を發刊した。後に小説をも書くようになつた。

「神の法律によりて」は一七〇六年の出版であるが、同年には「True Relation of the Apparition of One Mrs. Veal」(ザイル夫人なる亡霊の実話)といふ短篇を出版してゐる。「神の法律によりて」には著者として自分の名を掲げないで「生粋の英國人」の著者の著作と記してゐる。この「生粋の英國人」は、一七〇一年に出版されたもので、同年 Tutchin が彼の「The Foreigners」と云ふ詩において、ウイリアム三世がオランダ人であると非難したので、当時外國生れの國王に対する一般國民の偏見を是正するために書いた散文に近い諷刺詩であるが、これが大へん好評を得て同書が有名であつたからである。

「ロビンソン漂流記」は本書より十三年後に出版になつた。彼にはこれ等の外に多數の著作やパンフレットや新聞雑誌があり、合計二百五十以上に及ぶと云う。筆禍によつて入獄し、獄中で週刊新聞を發行する等多彩な生涯であつた。一七三一年歿した。

「神の法律によりて」はフォリオ判で、本文は各篇毎に頁付が異つてゐるが合計三百四十頁位ある。活字はかなり大きいものを使つてゐる。卷頭にアン女王への献辞、序文二八頁、次に To the Author (著者) と題し A. O. の署名がある詩二頁、The Introduction(結語)を詩で七頁あり、本文には多の脚註が施してある。内容は十二篇からなる諷刺詩である。一、異教の神への諷刺、二、聖書においても亦神と呼ばれる地上の國王にあてゐる諷刺、三、何故に神は惡人に權力を與えるかの吟味、四、帝王神權説につづける慣習法の研究、五、昔日の回顧、財産が權力の眞の又唯一の源泉であることを証明した、六、專制政治の覺書、その本質による吟味、七、歴史研究、凡ての國民が凡ての時代において專制君主を擁護し、自由を擁護するため不撓に実践をなしたことを確認するもの、八、歴史研究の続き、世界に相提携せる專制政治と偶像崇拜の論、九、神權説による迷妄君主の繼承の史的研究—世界における、十、同じく続き—英國王統の場

合、十一、英國の優れた政体の讃歌、十二、女王頌徳と政府及貴族の讃辭、女王へ。以上の如くデフォオ一流の論鋒で述べられてゐる。

因みに、滝山徳三著「デフォオ」(研究社英米文學評傳叢書)に彼の生涯や著作が記されてゐるが、本書については一言も触れられてゐない。(K・A生)

編 集 後 記

◇本号を以て第二五〇号、誌令も三〇年を数えました。巻頭言にもあります様に、幾多の変遷にも拘らず今日こうした記念すべき本誌が本學隆盛のうちに發行される事は御同慶に堪えない所であります。

◇表紙写真は、大學ホール玄関正面の螺旋階段。美しい線の交錯。学内の一隅にふと發見した建築美。八島先生の作品です。

◇不順な季候、早くも続々台風の來襲が傳えられて居ります。向暑の期り、各位切に御自愛の程を。御投稿下さつた諸先生には厚く御礼を申し上げます。(〇)

昭和二十七年七月十五日印刷
昭和二十七年七月十五日發行

關西大學學報 第二五〇號

一年誌代費三〇〇円(送料共)
大坂市大淀區長柄中通二丁目二番地
編輯 松 生 和 夫
發行所 松 生 和 夫
印刷者 西 井 幾 藏
大坂市北區川崎町七
印刷所 株式 ナニワ印刷所
大坂市大淀區長柄中通二丁目

發行所 關西大學學報局

電話 堀川(三三)七五六番
振替 大坂一六七七二番

隨風會會員募集

現下社会に於ける書の必要に鑑み、此度学内に書道会を設け、既に本年二月以來活動を始めて居ります。私たちは本会によつて書道の習練を行いなお随時書道展覧会、書道講演会を開催することによつて書に對する鑑識力を養い、また趣味として、精神修養の糧として、お互いに親和し切磋琢磨して行きたいと思ひます。本会は戦前元本学名誉教授故黄坡藤澤章次郎先生の御尽力によつて創始され同先生の命名にかゝる「隨風會」の名称の下に活動を続けて居りましたが、一時その中絶の止むなきに至り、戦後六年、漸く茲に発会当時の感激も新たに復活したものであります。就きましては学の内外を問わず、役員、教職員、学生生徒その他関係者各位の御賛同御協力を得、多数御入会下さいます様御案内申し上げます。



隨風會書道研究の一助

ます。尚御入会希望詳細お問合せの方は左記世話人までお越し下さい。

入会金 金壹百円也
会費毎月 金壹百貳拾円也

天六学舎 秘書課 田中一郎
千里山学舎 法文事務課 有福健

昭和二十七年六月

關西大學隨風會

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和二十七年七月十五日發行(毎月一回十五日發行)

關西大學學報 第二五〇號・七月號

専門書・参考書 豊富取揃
洋書(英・米・佛・獨)の即賣と予約

◎外国雑誌のバツクナンバーの取寄せ

大阪駅前 旭屋書店

TEL. 福島(45)2612
振替 大阪 26399

定價三十円